

広島俳句倶楽部

令和五年四月作品集

梅まつり

森口良樹

以前は、夫婦で夏休みや冬休みを利用して、よく三泊三日か三泊四日の小旅行に行っていたものだ。しかし、私が病気を
してからは、もっぱら、車で日帰りの、近くの紅葉狩りや銀
杏拾い、蜜柑狩り、蕨取りなどに行っている。光の冠山の「梅
まつり」もその一つだ。コロナ禍で、この三年、中止されていた
が、今年は開催されると知った。山の中腹一面に紅白の梅の
香が漂い、瀬戸内海を見下ろす景色に惹かれ、よく通ってい
る。途中には、茶屋や休憩所が設けられ、植本市や天満宮
に俳句の投句箱が設置されたりしている。そして、夫婦で
一句ずつ投句して帰るのだ。今年もまた、夫婦で梅見を楽
しめた一日であった。

梅の香のはやも匂へる駐車場

警棒の捌く人出の梅見かな

向かひ来る人に日の差す梅二月

人が寄る鉄捌きや臥龍梅

往き交へる白帆の船や遠霞

白梅や父が後ろに居るやうな

雲の間の深き青さよ揚雲雀

梅が香の天満宮に手を打てる

太鼓橋渡つて帰る道朧

若人にしづかに薰り夜の梅

《作品鑑賞》

知佳子

梅見をご夫婦で楽しみ、居合わせた方々とも心が通じ合うような豊
かな時間を過ごされたことが伝わる味わい深い作品です。

向かひ来る人に日の差す梅二月

梅にも人にも二月の日が差し、輝きの中にある。今のこの時を心から
惹き込んでおられます。

白梅や父が後ろに居るやうな

年齢を重ねて味わいが増す梅見。ご自身の中にお父様の面影を感じ、
お父様との人生を思われているのでしょうか。心に響く句です。

梅が香の天満宮に手を打てる

ご夫婦並んで手を打つ。思いを口に出すことは無いかもしれないが、
人生を共に歩んだお二人にとって、何よりの時間なのですね。

子離れの時期 綾乃

この春、息子が小学校を卒業しました。地域のミニバスケットボールチームに所属しており、彼がキャプテン。親も監督のお手伝いや試合の準備に追われ、慌ただしい日々でした。卒業や入学準備もあり、高校生の娘には、少し寂しい思いをさせたかもしれません。思春期のふたりの子は、むづかしい面もありますが、私としては、子育てはひと段落。次は子離れ、家族の変化の時期と思い、身軽ですが、寂しさもあるなかで過ごしています。

卒業歌稽古してゐる子供部屋

膝揃へ卒業証書待つてをり

春蘭のコサージュ友との別れかな

風光る引退試合の子の背中

卒団のユニフォームは舞ふ春の夜

言いなりにならぬと言うて吾子の春

子に胸を張つて生きたし梅ふぶむ

吾子の四肢すらりと伸びて雛祭

親として世話はここまで春疾風

予定なき週末と花種蒔く

《作品鑑賞》

井藤希

綾乃さんは家族の句をよく詠まれる。その綾乃さんがお子さんの小学校卒業に際して、家族の季節の区切りを感じそれを前向きに捉えつつ自身の一抹の寂しさも含め静かな句にされた。一つ一つの句に慈しみにあふれた眼差しとお子さんの健やかな将来を祈念する気持ちが表れている。

風光る引退試合の子の背中

キャプテンとしてチームを引っ張ってきた子の引退試合、チームの手伝いをしてきた作者の感慨も深く伝わる。「子の背中」が子を見つめる作者の優しさを滲ませていて印象的である。

言いなりにならぬと言うて吾子の春

いつのまにか強くなった我が子の自我に戸惑を覚えるが、それ以上に子の確かな成長と一途な前進が感じられることへの喜びがよく表れている。

予定なき週末と花種蒔く

これまでの忙しかった週末も一段落、ほっとする心の軽さと同時に少し気が抜けもする。「夫と花種蒔く」でこれからの新たな時間を明るく予感させてくれているのが嬉しい。

佐保光俊

大橋を渡つてゆける桜かな
橋の名は残りて枝垂桜かな

村上正人

見上げたる桜の中に翳のあり
花卉を重ねて暗き八重桜

高尾ひとみ

桜咲く町をしばらく歩きけり
風の吹くままに桜は散りにけり

あざみ

薬師寺は花の浄土のごとくなり
花の下行き交ふ人と声かはし

亜矢

花の山上へ上へと上りけり
一歩づつ歩く幼児花盛り

綾乃

人遊きてはらはらと散る桜かな
母と子に目白が花をこぼしけり

井藤希

小波立つ木村港や花の頃
弁当を手に見入りたる里桜

栄吉

早朝の花見に続くウォーキング
下蔭に憩ふ人あり八重桜

大畑恵

父母の墓前に咲いて山桜
病室の玻璃越しに見る桜かな

暁子

船笛や花人づく島の道
水音の絶へぬ隠詔花吹雪

すみれ

自転車で走る親子や花の土手
杖の身の子の見守りや花の園

知佳子

まだ人の数えるほどや朝桜
花の影赤子の頬に揺れてをり

ちどり

家に居て花を見たいと母の言ふ
故郷の桜を母と巡りけり

辻純江

携帯へ花見に来いと友の声
花の昼きんづば持つて友来たる

雲雀

桜咲く黄金山に住んでをり
朝に見て昼にも見上ぐ桜かな

ふじ女

夜桜や宴会の声遠く沸く

夜桜を駆け抜ける子ら帰り道

松田裕子

花の道見知らぬ人に声をかけ

母の手にそつと桜を乗せにけり

村上理江

名所の名挙げて桜の話かな

唇に一片乗りし落花かな

森口良樹

泉境に点る一灯里桜

花冷や迷子放逐流しをり

金川昭子

花吹雪愛でる幸せ車寿かな

上島康子

蛇行する川の向うの桜かな

河原静子

泉邸の水面に桜散り始む

紀英子

弟も居て夜桜を楽しめり

熊谷ゆり子

吟行の終りは寺の大桜

桑門わかこ

遅桜海の匂に近く咲く

須美れい

母の声聞こえてきたる桜かな

高嶋絹代

花衣ぬぐやひとひら床の上

高梨英子

桜咲く今だ苦手な坂登進

民

花吹雪まさをなる空見え隠れ

友岡紫山子

歳時記の葉にしたる桜かな

撫子

笑ひ声切るることなき花の下

みさ子

淡墨の里の桜を愛でにけり

美耶

その先は家路へ続く花月夜

やす保

八十路也はらから揃ひ花の宴

山野ウタ

同僚と待ち合はす丘桜時

神の山霧氷のままに暮れにけり

春の霜神休山を覆ひけり

このあたり芸備境や春の雪

安芸にまづ降り始めたる春の雨

黄の蝶を追うて歩ける大路かな

大学の方へ初蝶飛びゆけり

瀬野川の霞の光へ流れゆく

春風の吹き分かれたる大古墳

海へ向く五つの古墳ミモザ咲き

永き日の古備津神社の鳥居かな

佐保光俊

春泥の深き轍に雨の降る

沈丁の香れる路地を掃きにけり

椿から夜明に一羽飛び立ちぬ

篁を風吹き抜くる遅日かな

はしやぐ子を離れてゆけりしやばん玉

参道を行く人の触れ雪柳

権禰宜の春落葉掃く御神木

境内の外れに咲いて木瓜の花

初燕橋の袂を飛びにけり

囀りの止むことのなき道の駅

村上正人

川べりの去りがたきかな鳩の居て

山茶莢の咲いて青空近くなり

梅園の香りの中に小半時

よき声で鶯鳴いてゐる花辛夷

しばらくは吾の前を飛ぶ春の蝶

川べりに凜と鶉は一羽かな

暁を鳴きつづけたる春の鳥

句鳥いつしか声の長けにけり

日を返す景に隠るるや白椿

ゆるぎなき吾でありたし紅椿

高尾ひとみ

船を見に丘へと青き踏みにけり

手をつなぎ子とゆつくりと花の道

山鳩の声遠くなる花の雨

はらからの見舞を受くる蝶の昼

初夏の風入れて物たたみけり

ぼうたんへ眼鏡拭き拭き近づきぬ

小雨降り友と竹の子握つてをり

青嵐ころころ転ぶわが帽子

散歩してここが休み場青景風

ジャスミンの路地を抜けたる城下町

あざみ

新築の家に灯りや辛夷の芽

玄関の脇に日を浴び豆の花

パン屋より甘き匂や春の星

連弾をひとりでさらふ夕永し

泣いてゐるやうな弦の青春の星

一面に漣の立つ春の川

ソプラノのワルツを聴いて春の雨

桜見てピアノレッスン受けに行く

全開のグランドピアノ卒業す

卒業式我が子の背の遠く見ゆ

亜矢

莫塵抱へ今年の花を選びをり

花咲くや告知受けたる君と居る

荒れ道を行きて鎮守の桜かな

親と子の似通ふ肩に花の降る

祖父と行く砲台跡の桜かな

桜東風受けて暖簾をくぐりたる

テント張り子らと見上ぐる春の星

天窓のひかり花菜の一品へ

テノールの君の歌声鳥雲に

馴染みたる名札を外し卒業す

綾乃

浅春や砂州に寄り添ふ鳥を見て

連れ立ちて野辺いつばいに春の風

棧橋の水透き通り島の春

鳥風の安芸小富士に登りをり

二分咲きのミモザの山を歩きけり

岨道のミモザの風に休みたる

春昼や珈琲豆を妻が挽く

この庭の鶏のよく鳴きあたたかし

花びらの小溝に落つる辛夷かな

小石蹴り子の通り過ぐ春夕焼

長閑さやスポーツ新聞売り切れて

猪も夜には来るか馬酔木咲く

迫り出して語らふやうに馬酔木咲く

山桜漸く出来し砂防ダム

よちよちの子に踏まれたり犬ふぐり

春深し若き僧侶とすれ違ひ

おかへりと声を掛けたき燕かな

燕来て老爺破顔で並び居る

長閑けしや横綱の居る紙相撲

汐干狩隣近所の人に会ひ

白木蓮や主の居らぬ庭に咲き

蒲公英や子らの声する遊園地

土佐水木見ながら歩く山の道

草の芽を野に摘み母を偲びけり

つぎつぎと山桜咲き朝の道

花冷の昼間を雨の降りにけり

チューリップ赤い色から咲き始む

春の庭いつもの猫の通りたる

故郷の山路に咲いて花菫

病室の石楠花に日の差してをり

井藤希

栄吉

大畑恵

いく度か木橋を渡り野に遊ぶ

物干せば裏の山より匂鳥

燕来る一村はみな赤瓦

いく度も同じ蝶来る昼下り

花雪洞灯すに少し間のありて

咲き切つて雨の中なる桜かな

池の面の落花を浚ふ小舟かな

天守なほ夕日の中や残る花

騒立ちてやがて静かや花うぐひ

春雨がやがて屋根打つ法会かな

暁子

土筆摘む日差しと風の程よくて

分葱抜き三等分にして子らに

父植ゑし彼岸桜の枝を剪る

歩道に影素早く過る初燕

納屋の中一廻りせる燕かな

長閑なり庭の雀を見てゐたる

チューリップ子らの帰りし部屋に挿す

進級の子らに祝ひの本選ぶ

小手毬を揺らし軽トラ車庫に入る

石楠花の花の中より熊蜂

すみれ

春の浜鹿の足跡続きをり

鶯の道から瀬戸の海を見る

鶯の声して沢を振り返る

果境の橋を渡りて風光る

菜の花の道は母校に続きをり

鳥の飛ぶ度に花散る真上より

チューリップ覚えたばかりの歌うたふ

雨去つて霧島躑躅零れ落つ

杖置いて手を入れてみる雪解川

足元に残雪からの風の吹く

知佳子

梅日和母が部屋から眺めをり

春の日や砂のトンネル爺と掘り

チューリップデイサービスへ母送る

大通り端一列に董咲く

芝桜久々に行く母の家

母の田に一面に咲く花菜かな

母が家の背戸の畑に鼓草

青芝の庭を幼子駆くるなり

桐の花田圃の仕事始まりぬ

桐の花向うに川の流れをり

ちどり

まんさくや霊場の多き町に来て

花びらの遠く飛びたる梅見かな

辛夷の芽武蔵野の朝明けにけり

百千鳥障子に穴の開いてをり

卒業の少女晴着を見せ合うて

モジリアニの裸婦豊満や目備り時

歩くこと日課としたり花なずな

お互いに衣装褒め合う春日傘

著莪咲くや瓢箪池の橋渡る

鶺鴒の鳴きながら飛ぶ川面かな

辻純江

転勤に心は揺らぎ花辛夷

チューリップ咲いたと友を招きけり

フリージア微かに香る座敷かな

花咲くと手話のニュースの心地よき

花の道ぐるりと回り頂上へ

桜土手緩きカーブを歩きたる

咲き満つる花の間の芸備線

散り敷ける花びらの道帰りけり

竹の秋遠く近くに鶺鴒鳴く

穂の芽を坂から掻ける男かな

雲雀

縄跳びに触れそうになる八重桜

世界中夜でもないの朧月

誰かいる夜のベンチや川柳

夜半の春小さく畳むブルーシート

東西に新幹線過ぐ滝の音

次の滝また次の滝高くなる

滝の壺きつと誰かの落し物

埋め立ての四角が浮かぶ春の海

麦藁帽抑えファウルボール逸れ

双眼鏡覗く順番春の昼

ふじ女

街路樹の白れんすべて咲き満つる

昼過ぎてさらに濃くなる春霞

海辺への道に沿うたる花杏

外に出て春の満月しばし見る

校庭の桜にタッチ幼き日

あの峠越えたる光の大桜

花の道と或る家族に見とれけり

繻子を漕げば崩れてゆけり花筏

花筏分けて舳先の進みをり

目印の枝垂桜に友を訪ふ

松田裕子

寒戻る読みかけの本閉づる頃

日曜の絵硝子磨き受難節

茶柱の立ちし八つ刻桜餅

黒文字のしくと切りたる桜餅

引き継ぎを終へて一息桜餅

愛猫の墓標となりし雪柳

クレヨンで紅引かれるる紙雛

雪洞を数ふる子らに花の影

花冷えの夜に旅支度整へり

海風が落花を運び山下る

村上理江

春が来て黛執が好きになり

花屋より道に流れて春の水

春光の画像診断退院日

声低く身構へ合うて春の猫

玄関の出入り見てゐる巣鳥かな

ばんやりと外眺めをり春の午後

境内へ抜ける裏道落椿

薫る葉を味はひにけり桜餅

花馬酔木バスはダム湖に沿うて行き

一息に芍薬芽吹く二三本

森口良樹

プリズムの七色を生む春日かな

春の日に噴水軽く上り落つ

新畳匂うてをりぬ桜まじ

桜蕊笑い声する上に降り

桜蕊こぼるるシート畳みけり

花水木団地のバスのゆるゆると

朝夕に牡丹の蕾見にゆきぬ

ハンカチの花を包みて小糠雨

木に白き花の咲きけり夏の雨

桑門わかこ

少年と犬の座す土手春夕焼

久々の小さな宴初桜

落花舞ふ空の青きへより高く

裾野より咲き上りたり山桜

露天湯の朝日の眩し山桜

駅裏の馴染みの飲み屋菜種梅雨

春落景灰かに香る大樹かな

田起しの耕耘機追ふ鴉どち

鶏鳴の庭に摘みたる茗荷竹

山野ウタ

尾の反りのきれいに揃ふてびらかな

背をとんと赤子眠らす春障子

待ち合はすの番線や駅朧

袖口を捲り上げての春厨

前を行く春セーターの二人かな

歓声が花のトンネル抜けるまで

ミモザ咲く全員揃つて進級す

高梨英子

冬桜小学校の庭に咲く

日だまりに小さき水仙わつと咲き

また訪へる哲学の道春浅し

舞ひ落つる桜を追うて子ら跳べり

旅に来て錦帯橋や朧月

須美れい

枯葦の間を泳ぐ番鴨

地に触れんばかり白梅枝垂れたり

ぽつかりと昼月浮かぶ春の空

橋桁の裏に雀の巣のありて

秋沙

屈など山菜セットみやげとす

美容院鏡に映る桜花

花の雨電話の声のくぐもりて

山桜見ながら下り町に出る

紀英子

鶴亀を謡うてゐたる花の下

演説の選挙カーにも花吹雪

野兔に餌やる少女残る花

講堂に金の屏風や入学す

高嶋朔代

伊予に聞くお国言葉や春の昼

雲低く花の色なほ濃くなりぬ

景桜を天守閣より眺めたり

景桜の向うの空の青さかな

撫子

制服を脱ぎ捨て遊ぶ春の浜

瀬戸内に響く汽笛や花曇

花の雲大きく揺れて空覗く

三滝寺を友と散策山笑ふ

美耶

体調を気遣ふ便り木の芽時

頬白の近く鳴きたる待ち合はせ

滞滞の側道に沿ひ花の咲く

上島康子

垣根越し深紅のポピー風に揺れ

大鉢にトマトの苗を植ゑ終る

食卓に新玉葱の香り満つ

河原静子

はらはらと花びらの散る川面かな

道端のこの草あゝの草花をつけ

金川昭子

ビー玉の側溝に消えすみれ草

長堤に桜も人も連なりて

熊谷ゆり子

蝌蚪の足泥踏みしめて泳ぎだす

山笑ふ乳飲み子を背に鍬を振り

民

登校のランドセル花二つ散り

母の忌を終へてしきりに花の散る

友岡素山子

五センチの上筆探して摘みにけり

とび飛びにうつすら綻ぶ山桜

みさ子

なつかしや叩いて焼きし干鰯

晴天に集うてゐたる花の下

やす保

令和五年三月度作品集より

知佳子 私の選んだ十句

どこまでも雪のどんびの流れけり	佐保光俊
長閑かな三方良しの講話聞く	村上正人
臘梅にいく度顔を寄せたるや	高尾ひとみ
手の幅を物差しにして茄子植うる	あざみ
受験の日砂糖多めの卵焼	亜矢
轉りの林抜ければ天守見ゆ	暁子
春泥を踏んで畑へ菜屑捨つ	すみれ
てのひらの薄氷すぐに水となり	松田裕子
鉛筆の木の香りたる春夜かな	村上理江
土竜穴崩し崩して耕せり	山野ウタ

雲雀 私の選んだ十句

寒戻る岩にひよどり遊びをり	佐保光俊
早朝に参る社の木の芽かな	村上正人
春の空鳶も鴉も高く舞ふ	高尾ひとみ
枯葦の枝に飛び来る雀かな	秋沙
箸を止めしばらく聞ける初音かな	あざみ
山遠く春野の風を歩きをり	井藤希
はくれんが夜道に浮かぶ城下町	栄吉
畦焼の煙の匂ひに立ち止まる	すみれ
ムスカリの傍を土手へと駆け上がる	知佳子
岩を避け岩を乗り越え雪解川	松田裕子